

## 学生の声

### 「博士課程への進学」

工学研究科 電子工学専攻 北野研究室 博士後期課程2年 小林 弘 和

私は学部生の頃から、直感に反する現象を内包する量子論、特に光速伝搬する光子を量子的に扱う光の量子論に興味を持っていたため、電子工学専攻の中で、量子力学の研究を専門的に行なえる北野研究室への配属を希望しました。配属後は光子対と呼ばれる非局所的な相関を持つ双子の光子の検出系を研究テーマとしました。光子対は量子テレポーテーションなど、今までSFでしかなかったような技術の実現を可能にするものとして、近年盛んに研究が行なわれています。

北野研究室での生活は基本的に学生の自主性が重んじられており、自分のペースで実験や理論の検討を行なうことができるため、私にとっては非常に研究しやすい環境でした。また学生のみで行なわれる勉強会（輪講）や、学生部屋で突発的に起こる日常的な疑問に対する問答などは、大学でしかできないことであり、自分の知的欲求を満たし、さらに好奇心を掻き立てる有意義なものでした。このような環境の良さに加えて、学部、修士と培ってきた知識をもっと磨きたいという向学心や、修士ではやり残しの感が強かった研究を論文としてまとめられるまで続けたいという一念から、あっさりと博士課程への進学を決めてしまいました。少し軽率な判断であったようにも思えますが、自分のペースでじっくりとやりたい研究、学びたい学問に取り組むことのできる博士課程での経験は、自分にとって有益であるに違いないという思いが強かったのです。

さて、博士課程へ進学してから1年が経過しました。進学当初は周りの友人が皆就職してしまっていることもあり、自分だけが取り残されたような不安にかられました。しかし、同じ分野の若手研究者が集まる機会に、飲み会の席で話を聞くと、皆それぞれにある種の不安を抱えつつ、自分の価値観に照らし合わせて折り合いをつけているのだと知り、不安を払拭することができました。現在は論文執筆、国際学会、実験とやることが山積みですが、将来を考える重要な時期でもあります。自分で選んだ道、悔いを残さないよう精進します。

### 「博士課程への進学について」

情報学研究科 通信情報システム専攻 情報回路方式分野 博士後期課程1年 廣本 正之

私が博士後期課程に進学したのは昨年十月で、もうすぐ一年が経とうとしています。博士課程への進学を考え始めたのは比較的早く、修士に入った頃にはほぼ進学するつもりでいました。まだ研究に取り掛かり始めたばかりでしたが内容が非常に興味深く、是非博士課程まで継続して取り組みたいという気持ちがあったことが大きな理由でした。そのため修士一回生の間は就職活動はほとんど行わず、マイペースに研究に取り組んできました。

しかし修士一回生から二回生にかけての春、これまで漠然と博士課程に進もうと思っていた考えを少し見直す機会がありました。ちょうどこの時期は各企業の見学会や面接が盛んに行われている時で、企業はどんな雰囲気だろうと少し興味があったこともあり、就職を考えている同期と数社の見学を行いました。始めは本当にただの見学のつもりで就職先としての意識はほとんどありませんでしたが、見て回っているうちに、案外企業も面白そうだなと思い始めました。特に、ある企業の研究部門を見学した際に内容、雰囲気共に良い印象を持ち、これまでほとんど考えてこなかった就職という選択肢も考えるようになりました。

進学か就職か、おそらくこの時初めて真剣に考えました。しばらく悩みましたが、最終的に私は進学を選択しました。一番大きな理由としては、私が企業に行ってやりたいと思っていたことはほぼ全て大学に居ても実現できるだろう、という結論に達したからです。幸い私の所属する研究室では企業や他大学との共同プロジェクトが活発に行われており、アカデミックな研究はもちろん、企業で行うような内容にもやろうと思えば取り組むことができる環境にありました。このような状況もあり、大学に残る方がより幅広い研究が行えると思ひ、この時改めて博士課程に進学する決断をしました。結果的には当初の考えのまま進学という形になりましたが、様々なことを考えるきっかけにもなったことは有意義であったと感じています。

その後は進学後に向けて学振にも応募し、さらに、既にある程度の研究成果がまとまっていたので修士課程の短期修了にも挑戦し、その年の十月から博士課程に進学することができました。現在は自身のメインの研究を始め、いくつもの興味深いプロジェクトにも関わり、充実した研究生生活を送っています。もちろん就職していた場合との比較はできませんが、今は自身の選択に満足しています。博士課程の残りの期間も学位取得に向け、さらに頑張ってゆきたいと思ひます。